

電腦繪畫用サンプル



## はじめて読む方へ

---

小説でもない、童話でもない、脚本でもない。  
こういうのをなんというのでしょうか。  
でもそんなことはどうでもいいのです。

あなたが、まゆみにあるいは「マーちゃん」に、真一になって  
愛を見つけてくれればいいのでした。

かなり昔、このプロローグ部分を書いたときに思い描いていたのは  
おもひでぼろぼろの主人公の女性の絵でした。  
今になって書き足していますので、想像する人物は今の人になってます。  
加藤静史郎君とか、大橋のぞみちゃんとか。  
大人像では、蒼井優さんや、小雪さん、チェジウさんです。  
なので読み手のあなたも自由な創造で愛を見つめてください。  
<http://bit.ly/b3bSTu>

お願い

この本はフリーブックで自由にお読みいただけますが・・・  
著作権は放棄していませんので、商用利用はできません。ご注意ください。  
ですので、あなた個人でお読みになり、幸せを見つけること、何人も妨げられることはありません。  
このお話からイラストなどを生んで下さる場合は歓迎いたします。  
その他ご照会はwata△ks-lab.jp （△はスパム対策です）までどうぞ。

マーちゃんは小さな女の子です。

マーちゃんにはまだお友達がいません。

まだこの町に引っこしてきたばかりだからです。

前の町では明るくてちょっぴりおてんばな

外で遊ぶのが大好きな女の子でした。

だから今は、ご近所をいろいろ

探検しています。

この町にはとても大きな木があります。  
マーちゃんはなぜかこの木が気になって  
しかたありません。  
とても大きくて、見上げると空からさかさに  
立っているように見えてしまいます。  
何よりきにいつているのは、この木の下に  
来るとなんだかながつかしい  
とても良いにおいがするのです。

マーちゃんは毎日この木のしたに  
来ることが大好きになりました。  
ずっと後になってわかることですが、  
この木はこの町ができるずっと以前から  
このばしょに立っているご神木だったのです。

この森にはきれいな水の

小川が流れています。

ある暑い日のこと

マーちゃんはこの小川で

メダカと水遊びをしていましたが

さすがにつかれてしまい、

この木の下で休んでいました。

いつもの良いにおいのせいか、

いつのまにか眠ってしまったようです。

「もしもし・・・もしもし・・・」

「もしもし・・・起きなさい」  
だれかに呼ばれた気がして  
目をさました。  
すると、目の前に見たことのない  
おばあさんがニコニコして立っています。  
知らないおばあさんなのに  
知っているような不思議な感じがしました。  
「ここで寝ていると、涼しくなったから  
かぜをひくよ。そろそろお家にかえったほうがいいよ」

「マーちゃんね、お友達がまだいないの」

「おうちに帰ってもつまらないの」

「そうかい、マーちゃんって言うんだね」

「どうしてお友達がいないの？」

「マーちゃんね、引っ越してきたばかりなの」

「だからおともだちをさがしているの」

そのとき、気持ちのいい風がふわっと吹いて  
あの良いにおいがしたような気がしました。



しかたがないので、帰ろうかなと  
思いふりむいたとき、びっくりしました。

同じくらいの男の子が立っていました。

「ター坊、マーちゃんはお友達がいらないんだって」

「あんたお友達になってあげなさい」

「今日のところはお家まで送ってやんなさい」

男の子は二カッと笑ってマーちゃんの手を  
とってどんどんマーちゃんのお家のほうへ  
引っ張っていきます。

「ゆっくり歩いて」とマーちゃんが言うと  
男の子はゆっくり歩き始めました。

「おまえ名前はなんてんだ？マーちゃんがいいのか」

「マーちゃんは、まゆみって言うんだよ。マーちゃんがいいよ」

「ター坊って変」

「おなまえは？」

「好きに呼んでいいよ」

「じゃあ、たっくんにする」「たっくんがいいの？」

「いいよ」　ぶっきらぼうに男の子は答えて

「マーちゃんのお友達になってやるよ」

「まもってやるからな」

何から？と思いましたが、

そのときはふしぎとは思いませんでした。

家のまえまでできました。

「あしたも遊んでね」

「いいよ」

そうって、もとの道を走って

かえっていきました。

「あ、どこに行けば会えるのかな」

そう思ったとき、あの良いにおいととも、声がしました。

「ばあちゃんの木の下へくればいつでもいるよ・・・」

たっくん、不思議な子。

気になりましたが、その日はぐっすり眠りました。

朝が来てごはんをたべたら

マーちゃんは、いてもたってもいられません。

お母さんの「いいよ」の合図で、

お家から飛び出してあの木への道をかけていきます。

木は大きくてどこからでも見えるのでした。

おばあさんがいました。

「おばあさん、たっくんは？」

「ター坊のことだね」「小川のそばにいるよ」

最後まで聞かずにマーちゃんは駆けていました。

「転ばないようにね」ニコニコしておばあさんが叫んだようです。

小川が見えました。たっくんもいますが、

マーちゃんはびっくりしました。

たっくんのまわりに小鳥がたくさんいて

たっくんを止まり木にしていたからです。

「え、なに・なに・・・？。たっくん」

たっくんと声をあげたので

ことりはみんな飛び去ってしまいました。

「だめだよマーちゃん、おどろかしちゃ」

「マーちゃんも小鳥のお家になってごらん」

マーちゃんは両手を伸ばして、

しずかにたっくんのまねをしました。

そうすると・・・

あの良いにおいがして、少しすると

小鳥がやってきました。

小鳥がマーちゃんの頭の上で歌っています。

「かわいい」今度は小さな声です。

「ね、来るだろ」

「あんまり小川の側でやるなよ」

マーちゃんはそれから小鳥を呼ぶのが大好きに

なって、毎日その練習をしました。

小鳥のお友達もたくさんできたのでした。

それから・・・

---

まいにちマーちゃんはたっくんと  
森であそびました。森はとても広いので  
たっくんがいないとどこへもいけません。  
もうたっくんとマーちゃんは兄弟のように  
仲良くなっていました。たっくんは森のことを  
たくさん話してくれました。でも残念なことも  
あります。たっくんが大好きなお話を知らなかった  
ことです。

「たっくん・・・」 「何？」

「この森に猫バスはいないの」 「ととろもいない？」

「なんだそれ」

「そう、いないのね・・・」

でもたっくんがいるからいいや、そう思いました。

たっくんとお友達になって2年も過ぎたときです  
でもたっくんのことは不思議とわかりません。  
同じ小学校にもいないし、おうちへも遊びに行った  
ことはありません。でもそんなことは気にならないくらい  
毎日一緒にいてくれます。気がついたら、たっくんは  
側にいるのです。

今年は、何十年ぶりの大きな台風が来るそうです。  
昨日もどしゃぶりの雨でした。小川の水も増えています。  
いつものように、小川の側で小鳥の家になっていたとき  
のことです。

「危ないから小川から離れろよ」

「わかったー」

そのときです。小川の側の草が雨の水で  
すべりやすかったので  
マーちゃんの足が滑って  
ド・ボ・ン！「きゃーっ」  
マーちゃんが落ちてしまいました。

「マーちゃん！」

という声をきいたような気がしました。  
そのとき緑の光がひかったような・・・  
小川に飲み込まれて息もくるしくなっ  
ていたので何とか水面に出ようとして  
手をのばした時のことです。

「ごっ！」マーちゃんは頭を木にぶつけました。  
そうしてたっくんにつかまれたのを見ました。  
息が楽になって、そのとき見たのは  
小川の真ん中に小さな木が生えていました  
その枝が土手に伸びています。  
たっくんが、ひっぱりあげてくれました。  
それを見たたんマーちゃんの目の前が暗くなっ  
てきぜつしたのです。



「マーちゃん」「マーちゃん」「マーちゃん！」

おばあさんに、たっくんに、お母さんが  
さけんでいる声がしたので、そちらの方を  
向いたときに目が覚めました。

お母さんが覗き込んでいます。

「よかった目が覚めたわね」

「男の子があわてておぶってきたのよ」

「マーちゃん、マーちゃん言ってた」

「たっくんどこ？」

「たっくんて言うのね。知らない子だわね。

マーちゃんがニコツとしたからかえって行ったわ、変な子」

「小川に落ちて、小川の中の木とたっくんが助けてくれたの」

「小川の中になんて木は生えないわよ」

「あの子血相を変えておぶってきて・・・

マーちゃんのこと好きなのね」　マーちゃんは赤くなりました。

このときはまだ、このあとさらに試練が来るのをマーちゃんもお  
母さんもしりませんでした。

マーちゃんのお家は山と森のすぐ下にあります。

ちょうど小川の沢の下の方にあるのです。

マーちゃんのお家の側にも小川が流れています。

ちょうど大きな木からつながっているような気がします。

今日は朝からどしゃぶりの雨がまた降っています。

明日になったら台風が10年ぶりにこの町の上を

通っていきます。なので町の中はその準備で

大忙しです。お母さんも、今のうちに買い物に出かけて

マーちゃんは少し怖いけど、お留守番です。

だってあの良いにおいがなぜかしているので怖い気持ちもどこか

にあって、たっくんがそばにいるようなきがしています。

そうこうしているとお母さんとお父さんが帰ってきました。

夜から、風と雷と雨がひどくなって  
マーちゃんはとても怖くてなかなか  
眠れませんでした。それでもウトウト・・・

「まもってやるからな」

たっくんの声が聞こえたような気がして目がさめました。  
今日はお父さんの声もしたので降りていくと二人で  
窓の外を見えています。マーちゃんも見てびっくりします。  
もう小川の水があふれていて、家の周りが水でいっぱい  
だったのです。もうひなんするのも大変になっていました。

「マーちゃんは水が来たらぬれないように2階にいなさい」

お父さんに言われて2階に上がったときです。

雷の大きな音がして、そのあと、地響きのような音が  
山のほうから聞こえてきました。

あとでわかることですが、鉄砲水だったそうです。

すこしすると、ザザザザという大きな音がして家の周りの水がかわのようになっているようです。

まるで川の中に家を建てたようにです。

見ると水というより、泥のながれのようです。

お父さんとお母さんの叫ぶ声が聞こえました。

「水がきた」「2階に上がれ」

家が大きくゆれて動いています。お母さんたちが2階にきたと同時に水が上がってきました。

「何かにつかまれ」とお父さんの叫び声です。

「たっくん助けて」とおもわずマーちゃんは頭の中で叫び始めました。そのとき・・・

「ゴン、バリバリ」と大きな音がして、家が何かにつかついた感じがしました。気が遠くなりました。

お父さんもお母さんも気が遠くなっていました。

気がついたのはすっかり水も引いた次の日の朝でした。

次の日、窓から出てみてみなびっくりしました。

「こんなところに木があったか」

そう、まるで小川の中にいきなり木が生えたような  
かんじでした。その幹と枝に家が抱えられたように  
守られていました。「不思議だ」

「たっくん、守ってくれたの」と心の中でマーちゃんは  
何度も繰り返しました。

町はあの大きな木のそばに木々がせき止められて  
まもられたとあとでわかりました。大きな木には、  
小鳥たちがみな避難していました。

マーちゃんのお家は住めなくなかったので、町に  
引っ越すことにしました。この日からマーちゃんは  
遊びにでられなくなってしまいましたし、たっくんも  
姿を見せなくなりました。とっても悲しかったのですが  
泣きそうになると不思議とあの良いにおいがしてきます。  
おばあさんとたっくんと悲しいお別れになりました。

「さよならも言っていないのに・・・」 「バカ」

マーちゃんは大人になるしかないように思えました。

マーちゃんは町にこして、  
小学校を卒業するまでにたくさんの  
お友達ができました。いつのまにか  
たっくんという名前も忘れてしまいましたが  
あの日小川の中にできた木のそばに、  
木の赤ちゃんがあって、その木がとても  
なんだかなつかしい良いにおいがして  
新しいお家のお庭に植えていました。  
それからはお家も良いにおいにつつまれていました。  
マーちゃんからまゆみちゃんになり月日も流れました。  
それからマーちゃんは、何か困ったことがおきると  
不思議になんでも上手くいく不思議な体験をたくさん  
していました。それは、大人になって働くようになるまで  
続いていました、良いにおいといっしょに。

## 思い出からの始まり

---

私には、誰にも話すことのなくなった思い出がある。

とくに秘密だったわけではないが、その不思議な体験を誰も信じなかつただけだ。父や母でさえ。まだ私が小さな女の子だった頃のまるでものがたりのような思い出。

町に移ったころには、少しだけ大人になり話さなくなった。真剣に話しても、最初は興味深く聞いている友達を失うことが解ったから。

そのうち自分でもすっかり忘れることになっていた。

## 記憶

---

ただ、疲れると大きな木をさがしている。そうしては思い出し心の中ではなしていると、優しい風に吹かれるような気がして安らぐから。

都会に出て社会の一員となり、幸運にもすぐに仕事が見つかった。今思うと不思議なことだ。学生時代に真剣に勉強していた友達でさえ苦労したというのに。

その学生時代には、自分には半ば趣味とも言えるクラブ活動に没頭していた。とはいっても皆のように、高い目標や目的があったわけじゃなく、パソコンで、描いた絵や写真を使ってお話を創ることが好きだったただけだ。それが幸いしたのか、不思議なことに雑誌の紙面を作る仕事がやってきた感じだ。 (女の子のときのように、数少ない仲間と笑う写真)



## 変化

---

私には彼がいる。

私には出来すぎなくらいの人。不安といえば、私を好きだというくらいに仕事にも一生懸命なこ  
とくらい。それでも、TVのようにドラマチックではないにせよ山あり谷ありを経験して、この先  
は見えるくらいの年数になっている。

そうやって互いにもうちょっとがないまま、微妙なバランスを保っているのかもしれない。  
勝手な思いこみかもしれない。。結局答えが見つからないのだ。

最近なぜだか、不思議な思い出の答えを見つけなくてはならないような、焦りにも似た急いたき  
もちが続いている。

なぜだろう。

疲れの見える顔を見かねたのだろうか、私にとってはまた幸いなのだが上司に呼ばれ、やめさせ  
るわけにいかないかわりに、出てくる気になるまで勝手に休め、給料も無いぞと怒鳴られたのだ  
。

やはりここでも都合よいという具合に不思議が働いたのだろうか？

そうやって休職させてくれた上司に感謝しつつ、あの続きの答えと自分を見つける時間を得た。

彼の部屋を掃除した。いつもは二人で面倒そうにするのだが、気が付いたら整然としすぎだろ  
うか・・・

「ごめんなさい」だけでは彼を大きく傷つけることになるかもしれない。

しばらく考えて、経緯とこれからどうするつもりか、行き先などは残すことにした。

しばらく戻ることは無いかもしれない。いいや、戻れなくなることも気持ちの奥では覚悟してい  
るのかもしれない。

ただ、このときは彼にとっても始まりになるとは想像すらできるはずもなく、悲しいのか何なの  
か解らない涙があふれたが、なんとか彼の部屋をあとにすることが出来た。

またしても

---

つかれきって帰った真一の目に飛び込んだ

書置き・・・

またしても！ 真一はそうおもった。まゆみのやつめ。

もう次は結婚だろうというくらいの付き合いだ。

それくらい長い。

同じ会社のいじめ甲斐のある部下になったものだから

なんだかその延長で決められないまま続いている。

まゆみにしても、何か踏ん切りのつかないことがあるのか

結婚の2文字を口にしたことがないが、なにやら反対する

理由も無いという、はたで見てダラダラな毎日なのだ。

まゆみという女は、興味があると子供のように毎日でも繰り返す。

たとえば面白いと思った映画なら平気で繰り返し見ても飽きない性格だ。

だが飽きることもあって。その場合は周囲には、訳もなくに映る。

だから、二人は、何度も別れと付き合いなおしの連続だった。

彼女の場合は、別れも何も、そのまま会わないだけだから厄介なのだ。

女の場合は、思い切りがいい。振り返っても見えないように。

「曲がり角」を曲がるのが定番だが、彼女の場合は極端だ。

だから、真一は「またしても・・・」そう思った。

だが、置手紙だけが今までとは違う。妙な胸騒ぎがした。

そういうまゆみとは続いている。

俺は本当に好きなんだな。と思ったとき妙に悲しくなった。厄介な愛だ。

## 故郷

---

ここにこなくてはならない。そういうことはぜんぜんなく  
飛び乗った列車は、気がついたら私が社会人になるまでいた街だ。  
ポーッと窓の外を眺めていたら、列車のアナウンスで懐かしい地名が  
聞こえたから降りた。それだけのこと。

彼とかってに別れた。別れたものには、思い出が必要なのに、私にはなんだか慰めてくれる思い出がない。しいていえば、彼と過ごしたあの部屋なのに、そこを出てしまった。

でも仕方がない。あのまますごして幸せそうにしても、たぶん私は幸せじゃない。私を愛しているという彼なら、それは不幸だ。だから、思い出がなかろうが、一人でなにかを探すしかない。

それを見つけたら幸せなんだろうか。それすらわからない。  
降りてしまった故郷は私が社会人になってからは来ていない。家族ごと都会に戻ったからだ。  
まだ懐かしむほどではないような気もするが、それでも変わってきているようだ。

ここに思い出を探しに来ているのかもわからない。それでも足は、住んでいた家に向いた。  
なんだか懐かしいうような、良いにおいがする。

## 良い香りの木

---

中高生のときは、この町のこの道はよくお買い物で歩いた。

小学校の途中までは、深い森の入り口あたりに家を借りていたが、今年と同じ台風の多い年に鉄砲水で流されてしまった。家族とも命は助かったのだが、その後町に出て、それ以来森には近づけなかった。私は行きたがったようだが、親は嫌がった。なので、助かったときにみつけた小さな幼木を新しい家の庭に植えた。その木がとても良いにおいがしていたからだった。森がそこにあるような錯覚を小さなときはしていて、よくその木の側で眠りこんでいたらしい。

なぜか、小鳥がよく来たので、その小鳥が私の頭にのっていたらしく、それを父母は楽しげにみていたらしい。

よく考えてみると、怖い記憶だけがのこった災害だったが、怖くてもそれは思い出なのかもしれない。森のほうにあった家はどうなったんだろう。なんだかとても気になる。植えた木がどうなったか見てそれから足を向けてみようと思う。

この商店街を抜けて、あの坂を上ったところに、木を植えた庭の家がある。

そうだ、泊まる場所も考えなくちゃ。

宿泊するところといっても・・・この町じゃ。・・・

気が進まないが、高校の同級生の家が旅館だったからそこにした。気が進まないのは、高校のときに、その子に告られたからだ。幼馴染とは微妙に違う空気になるものだし、気が進まないが、この町に帰る家がないから仕方がない。それに、台風が来るかもしれないという天気予報もあるので、夜の雨に打たれる気になれないし。

突然「マーちゃん」と呼びかけられた。

どこかであったことのある、おばあちゃんだ。「は？」

その呼びかけは小学校以来効くことはなかったので驚いた・・・しかも。

「今日は小学校はないのかい」「雨が来るから気をつけてお帰り」

「え？」

おばあちゃんの後ろに、小学正の男の子がいる。

「たっくん？」「え？」

その呼びかけには答えてくれず、ニコニコして歩いて行ってしまった。

「たっくん・・・ってなに」

私の中でしまいこんでいた記憶がよみがえって来た。

まさかあのたっくんのわけないじゃない。

あの災害のあと、おばあさんとたっくんにあう事はかなわなかった。

町の人にきいても、皆、きみが悪いというように避けた話だ。ご神木がこの町を救ったというのがこの田舎町の定説になってしまっていた。つまりこの話は触らぬ神ということになったのだ。

## 愛をうめるもの

---

まゆみが消えてから、1日たった。

それにしても、こんなに部屋を片付けていくなんて、ばっかじゃないの。そう思ったら泣きたくなった。

妙にきれいになった空間は、なんというかかえって廃墟の中に入ったようだ。まゆみの置手紙をみたときには、ガラガラと何かが崩れるようなきがしたのだ。

こういう空間は自分の分まで生活感が消えたような気がする。いままでの歴史も何もかも一気になくなった感じがするのだ。

テレビを見ていても、パソコンに向かってみても、常に、携帯を側に置いた。

男というのはほんとうに直線的に歩いている。振り返れば、なにもかもが懐かしいものであふれている。それはゴミであってもいいのだ。

彼女の髪の毛をソファに見つけてそれを定期入れにしまう自分がもっと悲しくなった。

たった一本の髪の毛は、彼女が自分の手串が好きで、うっとりしている間によく眠りこけたのを思い起こすのに十分なのだ。

曲がり角を曲がるように、思い出すものはすべて見ないようにすべきなのはわかる。だがどうにもそれができないし、そうしろという女友達がないのだし。

とにかく、思い出で部屋の中を散らかすしかない。

だが、いつも左にあった景色が空白になって見えないことに気がついて、どうしようもなく涙になる。帰ってくるだろうとおもうことだけが救いだ。

こんなに悲しいのは、やはり愛だからなんだろうな。これを埋めるには、まゆみしかいないではないか。

ばっかやろうかと心の中で叫ぶしかないのだ。

## 雨

---

今日はけぶるような雨だ。小雨というか霧というか  
そして緑と土のにおいがする雨。

旅館の傘を借りて出ることにする。もしどしゃぶりだったら、迷うことなく寝ていた。

というのは昨日の夜は、かつての同級生に根掘り葉掘りいろいろ聞き込みされた。それをはぐらかすだけで疲れてしまっていた。朝から、温泉にでもつかりたい気分だ。

その友人から逃れるためにも、この雨の程度は良かった。とはいっても、車で送るとか言うのを断るのには相当苦労した。

町に引越したころの家を見に行くことにした。家をとよりよりは、あの木がどうなったか、どうしても見てみたかった。今も良いにおいと小鳥であふれているだろうか。

あの坂をのぼれば・・・宮崎アニメのタイトルのようなシチュエーションにうれしい気持ちになる。自分の単純さかげんに、とほほと思いつながら歩く。

問題の坂の下についた。家のほうを眺めてびっくりした。あの幼木は、巨木になっていたからだ。坂を上るまでもない。巨木だ。あの、おばあさんとあった木にくらべたら巨木という表現はどうかとおもうのだけれど、街路樹などと比べたら、明らかに巨木なのだ。

かすかに「マーちゃん」と呼ばれている気がした。

## 愛の重さ

---

まゆみがないと食事が味気ない。

だから食欲がわかない。

学生時代から自炊をしていたので、料理にはちょっと自信がある。居酒屋のアルバイトもした。

だから自分で作ったこの食事も、味はそこそこいいはずだ。

だけど、どうしても美味しくない。料理をすることで、とりあえず忘れてみようと思ったのに。

だから時間をかけて作ったのに、彼女が失敗したチャーハンのほうがはるかに美味しかった。

好き好き言っている恋の間は、見たり聞いたり、時間を一緒に使うのが楽しいし、

何かの記念日を決めてお互いのために、何かを買ったりするのが楽しい。

だけど、それはほとんどは自分のためだ。自分が楽しければ相手も楽しかろうというものだ。

形になっていたり、何か量で表そうとすれば、それも可能かもしれないものなのかな。

でも料理が味気なく、まずくなるこれはいったいなんだ。

掃除をして、部屋がきれいに広くなったのに、悲しくなるこれはなんだ。

計りようのない、漠然として存在の大きいなにかがまゆみにあるのか。

恋愛というが、

これが愛のほうならあまりに悲しすぎる。真一はそう思った。

恋なら楽しいはずなのに。

まゆみの料理が美味しいのは、愛情の分だったのかと今気づいた。



## 縁というもの

---

縁というものがあるなら縁のあるもの同士は  
必ず出会うという。離れてもかならず出会う。そういうものだそうだ。  
日本では、赤い糸、中国や韓国では縁、ほかの国でも天使の矢など  
いろいろな語り継がれがあるんだそうだ。  
縁のないもの同士がであって一緒にいたとしても、それは修正を  
受けねばならない。悲しくても。放っておいてもいつかそうなるんだそうだ。

まゆみは真一のことを考えた。この数日は忘れていたのに、目的の地かも  
知れないところまで来ると急に思い出されるもののようだ。  
真一とは縁がなかったのだと思うしかない。もし縁があるなら、かならず  
一緒になれるだろうが、そんな気がしない。  
いろいろ捨てたのだから悲しくないはずなのに、むしように悲しくて涙が出た。

それでも進むしかない。  
まずは、あの木をみなくちゃ。  
坂を一步した。

## いつもの匂い

---

坂の上に見えるのだから、木があるのはわかっている。

だけどもゆみは驚いた。

いつもの良いにおいにやさしい風とともに包まれたからだ。

そうして聞いた。「マーちゃん」「おかえり」

もう、そういう声を聞いても驚かない。

あのたっくんに違いない。

ついに木の下に来た。塀の中にまでは今はほかの住人の家

だから入れないが、それでも見上げると、枝の下だ。

すごい、小鳥のアパートのようにすごい数がいる。

たっくんは小鳥とお友達だったから、きっとこの木もそうだったんだ。

あの良いにおいがする木だしね。

あのおばあさんの木もここから見えるんだよね。

あのご神木も相変わらず、森の真ん中に立っている。たぶん、今も

未来も立っているんだろう。

そのとき小鳥が降りてきて、まゆみの頭の上に1羽とまった。

小学生のあのころに戻ったような気がした。

たっくんはよく言っていたね「まもってやる」って、

たぶんずっとそうしてくれていたんだね。

「またまもってね」そう思った。

「ずっとまもってやるよ」

そう聞こえた気がして、我にかえった。

旅館に帰る時間だ。「またね」

そうやって坂を降りることにした。

## 残酷さと悲しさ

---

俺たち別れたのかな？

そのところがぼやけたままだ。

二人で喧嘩はよくした、たいていはつまらないことばかりだ。そうした次の日にゴメンというのが俺の役目だった。そうすれば、怒り続けたふりをしてパイとするそんな横顔がお気に入りだった。

たった一つの自慢は、絶対にまゆみには手を上げたことがないことだ。本気で怒ったときでさえそんなことは思いもしなかったから、これから先もそういうことはないはずだ。

そんなことばかり、この数日は考えている。

すでに瓦礫になったこの部屋のなかですることはひとつ、なぜ別れなくてはいけなかったか。 を考えること。

その理由さえあれば、次の一步もできるというのに、それが見つからない。それがとても残酷な仕打ちに思えてならない。

どうして、まゆみの言葉をこんなに思い出すのだろう。一緒にいたときは、覚えているはずもなかった一言さえも思い出してしまう。それが悲しい

以前、努力する人は嫌いと言っていた。仕事のことかと聞いたときに、私のことと言った、その意味が今わかる。

どりよくしなければ一緒にいれないならと言う意味だ。

がんばるとか努力するようなことじゃないと言うことだね=愛は。

きっと縁とか赤い糸とかいうのはこれのことなんだ。

自然に、なにもしなくても一緒にいられなくてはならない何かが愛情なんだね。

俺たち、そうだったはずじゃ？ 俺なにか努力したかな。

何かのドラマで見た、トライエンゼルの縁結びのキューピット人形をほしいと思う自分がとても悲しく思う。

写真を飾ろうと思った。

きっと女友達がいたら、怒られるだろう行為だ。

だが別れたのかどうかわからないのだからと自分にも言い聞かせたような気がする。

彼女は写真をとられるのが好きじゃなかったから、探すのが大変だ。

それに、出て行くときに、写真もあらかた処分したに違いない。

それは、やさしいのか残酷なのかわからない。

留守番電話の録音も消えていた。安物のロボットのような登録音になっていた。

やっぱり瓦礫の中から彼女の痕跡をさがすような感じになってきている。

爆撃された瓦礫の中から家族の痕跡を探す。そんなどこかで見た映像が頭をよぎる。

真一の頭の中は、真弓でいっぱいなのだ。

彼女のぬくもりを思い出そうとしている毎日がある。

なのに、よく思い出せない。

ぬくもりというのは、思い出の中にある。

どうしてもっと思い出を作っておかなかっただろう。そう思った。

だが別れる予定で付き合うはずもない

顔はわかるし声も思い出す。なのにぬくもりだけが抜けている。

もっと彼女を抱きしめて、顔を触れて、そうしておかなければならないわけが  
今わかった。

そうやって、思い出が心を癒して忘れさせてくれるのかもしれないが、

それがない分だけより鮮明な記憶だけが残っている。

それは彼女が消える前の晩の笑顔だ。まるで昨日のように。

## 愛しさ

---

こんなにも愛しいということが苦しいのをはじめて知った。

片思いの苦しさとは比べようもない。

片思いとは結果がまだ出ていない苦しさ、思い切りまでの準備期間なので、ある種の壁を超えるかどうかの自己確認だ。

だが、愛しいというのは、まったく違う。

恋しいが育っていき、無償の愛に行き着いたときに味わうものかもしれない。

彼女がいなくなってからは、まったく欲というものが無い。これは命さえも含まれる。

彼女の命にかかわるなら、喜んで今なら命を肩代わりできる。そう思った。

肝臓がほしいなら、喜んで差し出そう。

目がほしいなら、喜んで片方出す。そういうものだ。

まゆみがいたときには恋だ愛だを考えたことさえなかった。一緒にいることが当たり前だった。空気のようなものだった。

空気はなくてはならないが、普段はその大事さにきがかからないというか、おそらく宇宙や、深海にもぐらなければ気がつかないだろう。

もう駄目だ・・・

彼女を探さなくて。もう駄目だ。

次の日、上司に呼ばれた。

「なんだその骸骨みたいな顔は」

「自分の彼女くらいしっかり手を離すなバロー」

「あんにやろうといいお前といい、どうなってんだ。」

「縄で縛ってもつれかえるんだぞ。それまで出てくんな」

「めし食え」「あんにやろうの田舎へ行ってみろ」

そういつて見かねた上司が休みをくれた・・・

感謝した。

とにかく今日のところは寝て明日出発する。

昨日から雨で蒸している。

「マーちゃん」と呼ばれた気がして飛び起きた。

おばあさんとたっくんはどうしたろう。

思い出してみると、どうしても頭から離れてくれない。

あの小川にできた木はなんだったんだろう。

思えばあの木に家族は助けられたような気がする。

そうして見つけた、ちいさな幼木。いいにおいのする。

坂の上の家によく根付いたものだ。木は根を張るとき

には命がけだ。もし失敗すれば枯れてしまう。

成功した木だけが立っていられるのだと気づいた。

そうやって、何百年と同じ場所に立っているのだ。すごい。

なんだか、命っていうものには、それぞれに限りの量があって

それをもしかしたら使えるのかもしれない。人にもできるんだろうか。

あの小川の木は、いっきに使ってくれたのかもしれない。

だから、もう一度命をはぐくむには、幼木になるしかなかったのだろうか。

よく坂の上の家の庭に根をはってくれたものだとおもった。

あの木、あのおばあさんやたっくんのような緑のにおいがしていた。

でもどうしてそんなことを思い出せるのだろう。

たっくんを思い出しただけでもすごいのに。

## 最後の記憶

---

雨のなかなぜか、涙があふれてくる

雨のせいでできるけれどそうじゃない。それにいまさら誰をごまかそうというのだ。

思い出があふれているあのアパートを飛び出してきた。

だから思いでもなく、悲しい日のはずだったが、そうじゃなかった。

思いでになるものは捨ててきたが、記憶までは捨てられない。

真一の言葉は記憶になって今の自分にはとても辛い。

愛されて幸せだったのだ。それに気づいた。

「ねえ、まゆみ・・・さいごの記憶って知ってるか？」 「俺もね経験はない、あはは」  
「人はこの世で最後にありがとうって言うときに、最後に見たい人が天国への切符なんだって」  
「その記憶があるから次の世でも幸せになれるらしいよ」 「その記憶の人にまたあえるんだって」

「だから・・・」

「俺のね目にまゆみだけ映っていてほしい」 「ほかはなにもいらない」

「つぎの瞬間に死ぬことになっても、また会えるからな」

そのときは、死ぬという部分に腹が立って、怒って見せた。

が、今はその言葉、あのときの数分がいとおしく悲しい。

私は最後を迎えるとき、誰を見たいだろうか。

たぶん真一かもしれない。

たっくんかな・・・

そう思う自分にむしように腹が立つまゆみだった。

## 普通がいい

---

まゆみの口癖を思い出している。

列車の揺れに身を任せながらその口癖が耳元で聞こえる。

「私ね、普通でいいの」「普通に思っただね」

「どうして・・・」

その「ふつう」が一番難しいんだよ、まゆみ。

「特別はね、気を使うでしょ」「疲れてしまうのね・・・」

「一緒にいて安心したいの」「だから疲れない普通がいいの」「息を吸うように」

男は自分の彼女を何かにつけて特別にしたい。でも女はそうじゃないんだって  
そのとき知ったものだ。

気を使いたくない、存在が癒される、そうありたい。

しかも（そのときには）一番難しい注文は

「努力しないで」「頑張らないで」ということだった。

まゆみ、いまはそれはすごく簡単って気がついたよ。

ふつうに愛せていれば、そうなるんだよな。

「努力しなければ、がんばらなければ」いけない関係なら  
最初から駄目だってことなんだよな。

俺はまゆみが空気のようなになればならないけれど、でも  
あたりまえの存在なんだ。空気を吸うのに頑張るやつは  
いないだろ。そういう愛はだめなのか・・・

その答えは、まゆみに会わなくちゃ出ない。

流れる風景がまゆみに近づいている唯一の証なのだ。



## 運命の意図するもの

---

まゆみが消えてみて初めて考えることが多すぎる。  
どうして、無くしてみてもはじめて人って気づくのか、  
よく言うことだがそれは本当だ。無くさないと気がつかない。  
だけど無くしたときにははっきり言って遅い。

一番気がついていないのは、お互いかもしれないが、愛についてだ。  
恋愛とはよく言うが、恋のはじめのころは、喜びとか楽しさとか  
知らないことの発見の連続だった。  
初めて抱きしめたときに、体の柔らかさ・暖かさに感動した。  
だが、彼女がいなくなる最近に抱きしめたときには  
なぜだか涙が出た。悲しいのかうれしいのかまったく意味不明のものだ。  
たぶん、そういうのは、意味がないのかもしれない。理屈じゃないのかも。

たぶん運命はまゆみとともに歩き始めたのかもしれない。  
彼女はなぜだかトライエンゼルを信じていた、三叉の帽子をかぶった縁結びのキューピットだ。  
信じた二人は縁がある限りかならず出会うものだという。縁は切れないそう。和風に言えば赤  
い糸か・・・それをまた思い出した。  
だが、彼女とまた出会うならなんでもいい。  
そういう一切がっさいを運命というのなら、運命はどういう意図があってそうしているんだろう  
。  
どうして、自分からなにもかも奪い傷つけるのか。  
この列車で彼女の田舎に向かっていることで、本当に近づいているのか。  
台風が近づいていて外は暗雲というやつだ、とても不安になる。

## 愛を超えるとき

---

誰もが、恋と愛の到達点は愛だと思っている。

真一は確かに私を愛してくれていた。いやまだ愛してくれているだろう。

なんとなくわかってきた。

恋の頃には、思い出がたくさん残った。捨ててしまったけれど・・

愛は記憶だと思った。これだけは捨てきれない。そうして愛の最後の記憶も真一になるだろう。天国への切符になってしまったのかもしれない。

たっくんは記憶なのかどうか分からない。それにたっくんはいるの？

だからもし私が天国へいけるのなら、真一を待つしかない。

私は、愛しているという言葉が実は好きじゃない。

男は皆、好きと聞けば好きと答える。

愛している？と聞けば愛してると言うのだろうと思う。

だからそういう思いを確かめることができないとずーっと思ってきた。

けれど、突然思い出した。

それは、愛で、突然愛を超えることがある何気ない言葉。

日常になっていた、クリスマスのカードに込められた思い。

「生まれてきてくれて、ありがとう」

私は、今になってこんなことを見つけてしまった。私ってバカだ。

## 愛と食事

---

ついに彼女の田舎に着いた。

はじめてみる風景に戸惑いを感じてはいるけれど、  
とにかく何か食べなくては。ここ2日何も食べていないので、  
なんだか景色がくっきりしてめまいがする。

駅を出ると、商店街というか、よく言う銀座とおりがあある。この中なら  
食堂くらいあるだろう。

と考えている間に一軒の定食屋を見つけた。そのまま入る。

食欲があるんだか無いんだかわからないが、とにかく食べないと彼女を探すにも  
倒れては意味が無い。

注文した定職が配膳されると同時に、女将が言った。

「あんた、都会の人だね」「ここは田舎料理だからね、味が口に合えばいいね」  
確かに都会なら配膳のときにそんな余計ごとには言わないよなとおもいつつ、食べる。

「旨い」そう思った。こんな旨い食事は彼女が作った最後の料理以来だ。

「おいしいです」素直に言った。

「そうかい、御代分は美味しくしないとばちあたりってもんだ」と言って豪快に笑っている。  
それを聞いているうちに、涙が出てきた。自分の意思に関係なくポロポロポロポロ。

「おや、あんた泣くなんて・・・変わってるね」

すこしして、

「付き合っている人と別れたのかい、そうだろ」

凶星だった。

「男が食べて泣くときはそうなんだ」女将が笑った。

「彼女さんの料理も美味かったんだね」「どうしてだと思う」

「あたしのように御代ももらわないのに、どうして美味しく作れると思う」

「女は愛情という味覚があるんだよ」「お金じゃその味はでないのさ」

「好きでもない相手に料理なんてしないのさ」

「よりが戻ったら、おいしくたべてやんなさい」「美味しいって口に出せばいい」

そうかもしれない、美味しいとおもっていたけれど、美味しいとか、塩辛いときには  
辛いとか言えばよかった。

それどころか、卵焼きにほうれん草を入れられると喧嘩になってしまう・・・俺はバカだ。  
この店に他に客がいなくてよかった。

## 過去への回帰

---

この道を歩くのは、小学生時代以来だ。  
あの頃は、町に出るまで長かった。  
たっくんも消えてしまって、悲しかったのを思い出した。  
ただ一緒にいただけのかわいらしい愛だったと思う。  
歩幅も増えたせいか、あっというまの感じに正直戸惑ってしまう。  
もう少しで初めてこの町に来た頃の家跡に着く。

それにしても良く残っているものだ。友人の話によると、  
あの鉄砲水で残ったのは奇跡としか言えず、その跡を残すために  
そのままにしてあるんだとか。両親にしてみれば、そんな辛い思い出  
をみるたびに思い出させたくないから私が森に行くのは反対だったのだ  
と今わかった。たっくんも消えてしまったし。

そこを曲がれば家が見えるはずだ。

「え、あの木がない・・・」  
あんな大きな木がなぜなくなったの？  
家は半ば朽ちかけてのこっていて痛ましい。  
「マーちゃん」  
「え？」「たっくん？」  
手をつかまれた気がして振り返ると、たっくんが立っていた。  
「マーちゃん。大きくなったな」  
「たっくんは変わらないね」ってあたし、何を言っているの。  
「マーちゃんになりたいと思えばいつでもなれるって知ってた？」  
つぎの瞬間視線が低くなった。  
「ほら戻った」  
「何をしたの？」「どうしてあたし」  
「だってマーちゃんに戻りたかったんだろ」  
「そうだけど・・・」「バカ」  
  
「たっくん今までどこに行ってたの」「おばあさんは元気なの」  
「あの木がなくなっているの」  
「いっぺんに聞くなよ」

「だからマーちゃんをまもってやるっていったろ」  
「町のほうに引っ越したのはマーちゃん」「だけどいつも一緒だった。見えなくても」

「あ一面倒だから、おばあに聞いて」「あの木に行けばいつでもいるから」  
「この木はさ、マーちゃんにくっついていったんだ」

「マーちゃん、今日は雨が来るから、もう帰れ」  
そうやってたっくんは手を握って引っ張っています。  
あの懐かしい光景そのまま。・・・

「たっくん、わかったからゆっくり歩いて」 これも同じだ。

「あのね旅館にいるんだよ」

「知ってる」

相変わらずぶっきらぼうだ。でも答えてはくれている。

聞きたいこともなくなってきた頃着いた。

ふと振り返ると、いつもの私に戻った。たっくんも走って帰っていった。

なんだったのと思った瞬間に雨つぶが頬を流れた。

## 愛は愛より深く

---

まゆみの田舎について2日目だ。  
なんだか、まゆみへの想いを確かめるような毎日だ。  
自分が愛していたのに気づくのは良かった。  
だが、まゆみを失ったのだろうか。  
愛と憎しみは紙一重というが、まゆみを憎むような  
気になれない。愛よりもっと先があるからだろうか。

思えば、恋はまゆみといて笑顔で楽しさだけの頃だった。  
まゆみがいなくなれば恋なら淡く消えてしまうものだ。  
愛はどうだ。  
楽しいことなど何も無い。辛い。  
だけど、あのアパートのあちこちに愛は存在している。  
赤と青のおそろいの歯ブラシに、マグカップもそう。  
カーテンも、まゆみ用スリッパも、トイレの便座カバーまで  
まゆみを選んだもの。愛であふれている。  
冷蔵庫に張ったメモ書きの文字もまゆみそのものだ。  
もう黄ばんで見えかかっているのに大事になってしまった。

愛は、いろんな物に宿って、記憶の中に生きている。  
それだけに辛いものだと思い知らされた。  
中学生の頃の片思いも辛い、それをはるかに超えている。

頭で考えるものじゃない。心と心臓でトキメクのが愛なのだと思った。  
そして、この町にまゆみが居る。心臓は正直に答えている。  
まゆみに会う、そうして2度と手を離さない。

## 再会

---

今日は霧というか濃いガスにつつまれて幻想的な森だ。

たぶん低気圧が近づいているのかもしれない。

あの日もそうだった。

廃墟のような家の側を過ぎて、あの大きな木のほうへ自然と足が向いた。

そのとき手を握る感じがした。

「たっくんなのね」

「そうだよ、ばあちゃんが待っているって」

「暖かい手・・・」「会いたかったよずっと」

「ばか、いつも一緒だったろ」と握る手の力が強まった。

「おれはちっこいままだけどさ、あはは」

「マーちゃんはきれいになったな」

そんな話をしながら歩いた。

横には、今も同じように流れる小川のせせらぎの音だけ聞こえる。

おばあさんの木が見えてきた。

「えー、あの頃よりももっと大きいね」

「あの水にも平気だったのね」

「おばあは町を守った」

「え、何のこと」

ちょうど木の下に着いた。

## おばあさん

---

木の下に立った。

懐かしい匂いにつつまれて幸せな気持ちがあふれた。

「マーちゃん、来たんだね」声が聞こえる・・・

「知りたいことがたくさんあるようだね」

「おばあさん、どこにいるの」

「おまえさんの心に話しているんだよ」「もうわかっているんだろ」

「おまえさんの歳になっても、通じるのはやっぱり見込んだ子だよ」

「え？どういうこと」

「ター坊が見えるようになってよかったね」

「普通は見えないのさ」「特に大人になるとね」

「だが、お前さんの母親にも、ター坊は見えとったろ？」

「おまえさんは手を触れて感じることも出来るだろ」

「おまえさんは、愛の力に満ちているからだよ」

「いまもそうなのは、たくさん愛されたんだね」

「おまえさんもター坊もあの頃は愛に満ちておった」

「おばあさん」

「たっくんはなぜ子供のままなの」「愛って何？」

「ター坊は一度、おまえさんに愛を渡したんだよ」

「だからおまえさんに見えるようになるには時間がかかったんじゃ」

「だが、ター坊はあれからもいつも一緒に。あんたの側におった」



## 私の探しているもの

---

霧が濃くなってきた。

水のおいが私にもわかるくらいだ。大雨がくるのかもしれない。

まるで、あの鉄砲水の日のような感じだ。

「そうだよ。また鉄砲水がくるんだよ」

おばあさんの声がまた聞こえてくる。

「大丈夫、あんたは巻き込まれない」「ター坊もおるしの」

「おばあさん、どこにいるの」

とてもおばあさんに会いたい気持ちになった。

「私はマーちゃんの前におる」

前には霧の中でも見えるあの大木しかない。

「そうじゃ、もうわかっておるんだろ」

「私も、ター坊も、あんたたちが木の精とよぶものさ」

「もうこの場所に私は、何千年もおるのさ」

「もうあんたに姿を見せるような時間もない」

「あんたが最後に知りたいのは愛なんだろ」

そう、私の探しているのは愛だ。

愛だがそれは、

たっくんのものか、真一のものかなのだ。

「わかっておるよ」「あたしもター坊も」

## あの日

---

「あの日」

そうおばあさんが言ったとたんに、  
私の脳裏には、川に落ちた映像があふれた。

「あなたの命は終わるところだった」

「ター坊はあなたを守った」

そうか、あのときの木は。。。

「そう、ター坊はあなたを守ったのさ」「そうしてあなたを家に送った」

「そのとき、ター坊の命をわけあたえたんじゃ」

なんとなくそういう気がしていた。

「どうしてあのあとから居なくなったの？」

「ター坊は、あなたの居た家も守ったのさ」

「そのとき、少しだけ命を残しての」「いまのように姿が見えるようになるには」

「あなたが大人になるまでの時間がかかったのさ」

「だかの、大人になったあなたに見えるかどうかは賭けのようなもんじゃった」

「いつもあなたの側におったからみえるようになったのかもしらん」

「ここまでの話はあなたもうすうす感じておったろ」

そう、感じてた。

私の知りたいことでもあったがそれは確認になっただけ。

本当に知りたいのは、私の愛の行方だ。

## 愛は

---

すこししてからおばあさんがまた語り始めた。

「人は愛と簡単に言い過ぎる」

「マーちゃんは愛の答えを少しは理解したようだよ」

「人にとっては、最初の愛は、母と子にあるんじゃない」

「愛の基本といってもいいものさ」

「母が子を想うのは、理屈じゃないだろ、母からわけた命そのものだから」

「おまえさんも、母親には強い愛を感じておるだろ」

「それは母の命そのものを受けついたらなんだよ」「母だけじゃなく父親もだが」

「マーちゃんでも他の人でも好きというものは、それは愛ではない」

「人が恋とかいっているものさ」「人だけが持っているものなんだがの」

「人はそれと愛をよく間違っている」

「おまえさん、ター坊に惹かれてここまでまた来たのじゃろ」

「愛の本当がそこにもあるんだよ」

まゆみは記憶の中に光るものを感じたが、まだ釈然としないでした。

たっくんの握る手が少し力を増した。

愛が命だとするなら、確かに愛は楽しいとかでは表現できないと思った。

それよりも、厳しく孤高のものかもしれない。それに世の中のあらゆるものは愛で満ちていることになる。

## 再びの時

---

「マーちゃんや」

「もう時間が無いじゃ。まもなくまたあの日のように大きな雨が来る」

「マーちゃんに姿を見せている余裕もなくなってしもうたわい」

「ここからは、心に話しかけるから、もうお帰り」「ター坊」

たっくんが手を少し強く握って、街のほうへ歩き始めた。

「マーちゃんや、あんたは何の答えを探しにきたんだい」

「それは・・・」

「言わんでもよい。誰が自分の愛を受けるものかを探しているな」

「なんとなく、予感はあるじゃろ」

「だがその答えはもう少し先になる」

「今は、命は愛そのものだと理解するがいい」

さらにおばあさんの声は語り続ける。

「まもなくおまえさんを追ってきた男がター坊と会うはずじゃ」

「残念だがその男の命はつきかけておる」

まゆみは雷に打たれたような衝撃を受けて、しゃがみこんでしまった。

「本当なの、おばあさん」「そうじゃ」「運命は変えられん」

「私のせいなの」

「彼とは別れてきたのに、なぜ追ってきたの」

「おまえさんも少しづつ、命を与えておったということさの」

「さあ立って」

たっくんがやさしくたたせてくれた。

「とにかく、今日のところは帰んなさい」

「明日以降は森に来てはいかんぞ」

「来ようとしてもター坊が止めるはずじゃ」

まゆみの頭の中はパニックになりかけて、

その声を理解はできていなかったが、

どうにか、旅館まで帰った。

たっくんは走って帰っていった。でも側にいる

それは感じていた。守ってくれているのだ、私を。



## 嵐の日再び

---

旅館にもどったまゆみには、もうどうすることもできない。

どうすることもできない何かの法則のようなものに、ただ教えられていると感じていた。

窓の外はすでに、まゆみの心の中のような嵐の夜になっていた。

真一も、安全な場所にいてくれるだけを望むだけだ。

そのときおばあさんの声が聞こえた。

「真一も、おおきな定めにしたがう」

「定め？」

「そう、わしらも逆らえないほどのな」

「おばあさん、それはなに？」

「宇宙の定めじゃ」

「真一の明日はないんじゃない」

宇宙？話がすごすぎる。

「おばあさんたちは何？」

「わしらはせいぜいこの星の一時。人よりは長くても同じようなもの」

「人という腫を見守るようなものなのじゃ」

「さあ、私はまた森を守る。それも愛じゃ」

それっきりおばあさんの声が聞こえなくなった・・・

「たっくん？聞こえている？」

「うん・・・」

「おねがい真一を助けて」

「まゆみ、それは無理なんだよ・・・定めだから・・・。真一はあの家に行くよ」

「じゃ、行かないように伝えて。それならいいでしょ」

「わかった・・・伝えてみる。」

## 森の中の家

---

真一は、嵐の中歩いていた。

なんの根拠もないのだが、まゆみが、この街と森のどこかにいるような気がしていた。

街にはかすかに電灯の明かりがあるが、森への道は真っ暗だった。

そのとき、まゆみの声が聞こえたような気がした。

あの家にいる。

そう信じた。「いかなくちや」

そのとき、ふと袖を引っ張る手があった。

「おにいちゃん」「おまえ・・・」

「あのね。おねえちゃんが、危ないからあの家にいっちゃ駄目だって」

「え、ほんとか？」

次の瞬間には、もう森へのまっくらな道を走っていた。

ぬかるんで何度も足をとられても、それでも走った。

「まゆみ・・・」

「まゆみ、真一は行っちゃった」

「定めには抗えないよ」

まゆみの脳裏にその声が響いた。

いや、ぱぶーなんておもしろいクラウドができたというんで、早速10年間も寝かしていたのを補完しはじめることにしました。

で、電子書籍が、アップルとかアマゾンのおかげで、10年もまえの日本の失敗から一転して花開きそうなので、電子書籍考をしつつ、つらつら書いていこうなどと、思うとります。(ジジイカ)

紙の小説でも絵本でもそうだけれど、作家の意図って書いていないわけです。それは読み手の想像力を低下して、面白くなくしてしまうからなんでしょうが、そういう時代でもそのなぞを解き明かす方法はあったのでした。どこかの誰かが、作家にインタビューなどするからです。

あるいは、雑誌など編集室が編集後記というのをかいていたりします。まあサークルのおふざけのようなことが多いけれど、そういう部分に食いついているファンだっていますからね。

で、紙からメディアはネットに移ってきて、電子書籍もやっとその価値が出そうな時代がきたってことですかね。ブログがその兆しだったでしょうね。文章を長く書くのが嫌いという人はブログからツイッターに乗り換えています。まあ、世の大半はツイッターですかね。

そんなこんだで、こういうところにも電脳的にはなにか書けるのじゃないかと思って考えた次第。

編集後じゃないから、編集記とか獄中記(違うか)、エッセイとかいろいろ考えて、どれも電脳的じゃないので、どちらかといえばブログとしても使えないかなみたいな。

なので、恥の書きすてじゃないけど、それじゃかっこ悪いわけがかき綴りにしました。

何をやっても、こういうクラウドサービスでは初めてなんだから。

いいでそべつに(うちの3姉妹か!)、電脳ブック、もっと面白くなれ!



ぱぶーをいろいろ見回すと・・・

すでに、漫画を書いている人がいる。すげーと思ったが・・・

漫画家になるのは、いまやITを知らないと困る。という感じなのかね。

PCが漫画の創作に使えるのは、もう20年くらい前のことだが、NECの

PC-9801全盛期で、画面に標準で16色しか表示できなかった。

そんなころに、モンキーパンチ氏は取り組んでいた。

でたしかに今って、ネットから有名になっていくひともいる。

漫画では、松本ぱりっつさん（うちの3姉妹）

や

トポキチさん（だらだら毎日）

が個人的には好きだ。

毎日があさんの西原さんもいるな。

で、こういう上り漫画と、漫画家志望であったのかなという漫画では

はっきりとした違いが見える。

そう、実際にネットで見るとよくわかるもんだね。

画は細かいんだけどね・・・

ゲゲゲの女房の中で、アッキーナの演じる女流漫画家志望の女性（名前なんだっけ）

が漫画家になれなかったがその理由が、なるほどだと判った。

ま、こういう文章もおんなじだからね。

ネットだ、描いたもん勝ちってのもあるだろう。

このところ選挙後のTVのパターンとしてあの仕分けで有名になった、今回の選挙でも百万票こえの・・・といえはわかるかも。

TV局はこれでもかという具合にもてはやすよなと思われる。

一時期は、宮崎県の知事なんかがよく出ていたけどもね。

どうもあの、怒り事件のあとから放映されないよな。

まあ、地デジになるまでは視聴率を気にするからね、話題には敏感なんだろうけれど、それでいいのかと思ってしまう。

日本初の女性総理も不可能じゃないとかまでいうところもある始末。

これ、女性の皆さんが問題にしなきゃ。

「女性」とつくのは問題でしょうに。もとより男も女も関係ないでしょう。

男性とか女性とか頭につくのは、頭にきませんか？

あはしはね、この農業と技術立国の国で、技術支援が無駄と考える人を信用はしませんね。

2番目じゃだめなんですか？ だめでしょう。

だって、ツイッターとか、スマートフォンの売れている技術ってのは、大半が一番の日本の技術なくしてはできないじゃないですかね。

7割くらいは日本ちゃちゃちゃ なんです。2番目になったらその技術買いますか？

そもそも、2番目に落ちたものは全部あの韓国企業に持っていかれているでしょう。日本の技術者まで買われて。

安易にJALをなくせばいいじゃんとかあおるのもどうかと思いますな。

現場の人ら、CAとか、サービス技術は世界一でしょうに。

ただ経営者がアポーでんねん。

技術もすごいものがありますよ。リニアモーターカー。残念ながら

JRに国が傾いたから、こんな結果になっているけれど。

当然ね、世界の大手が狙うでしょうこの技術。

新幹線の技術は、お隣の国に売り渡したからどうなったか・・・

アメリカの新幹線の入札に、なんと日本の新幹線のまんまでわが国の技術は世界トップとかいって参加したでしょう？

東北新幹線そっくりの車体でね。笑 たぶんお隣の国ではね

国民のほとんどが日本が真似たんだといいはるでしょう？

だけど世界の目は日本の技術を理解していたから、日本に

傾いただけ。

もし、JALのリニアの技術が売り渡されたら将来の国益はパーだから、JALを要らない言うのは簡単だけど。国益まで考えて言っているのか疑問なのでした。

たしかに、不況に苦しんでいる企業も人も多くて。去年の派遣切りなんて悲惨だし、その元になったのも大手企業だからそこに厳しいのは判るんです。

でもJALって派遣切りでなにも問題になっていない。

JALを切れば、どんだけの失業を生むのか、恐ろしい。米軍基地なども含んだ日本の航空行政の歪の影でJALはという問題でしょうにね。

韓国などは上手だったとおもいますわ。

だって、インチョン空港って、アジアのハブ空港として認められたしね。港だって、いまや、お隣の国にもっていかれそうなわけだし。

もともとの作品はアニメでも作ろうかという  
コンセプトで作ったものだが、アニメといっても  
We bで公開するときには、絵本のようにしたかった。

だからもともとのシステム名は、「**電脳絵巻**」だった。  
当時：もう4年以上前にはF l a s h使いの学生がいた。  
それでも、絵本のプロローグの前半までしか  
アニメにできなかった。

宮崎アニメのようにしたいのは誰でも思うことだが、  
あのようなアニメを作るという労力のはかりしれないものがある。  
この作品でよかったのは、おそらく世界初（時期的に）の  
ページフリップ（めくり）だったことかも。デジタルブックの赤ちゃんだった。

[作品を見る。](#)

ありがとう

---

週間ランキングの範囲に入ったことを知った。

たぶん、どなたかしおりをつけて、コメントをくれてからかなあ・・・

作家になろうとか、何かを狙おうとかそういうのはないのだけれど  
読んでくれる人がいるだけでも良いよね。

この作品の原型＝童話のプロローグ部分はもう10年も前に  
考えたもの。

当時はプログラムの先生業をしていて、Flashを学ぶ学生の  
作品用のシナリオを考えていたんだっけ。

なんか当時は幸せで、だからこそ、主人公とか真一の心情を  
綴るという部分で続かなくなったんだっけかね。

とくに女性の心情を当時は理解していなかったな。笑  
そのご、いろんな不幸ごともあって、愛情もわかって。

ま、このパブーが急に現れたのもあって、  
再開にこぎつけたのでした。

でも、女性の心理というのはまだまだ宇宙だ。

読んでくれてありがとう

とりあえずは、なにかあればコメントをくださいね。

まだ途中の作品なので、なにかを思い出しつつ書き続けます。

完成するまで。

## 韓流ドラマ考察

---

アジアでもっともドラマで成功している国といえば、  
韓国。

日本の韓流ブームは、遅いくらいで、アジアでは  
数年もはやかったらしい。

なぜ日本で遅かったといえば、韓流ドラマの要素である  
「恋愛」「病気」「美形スター」  
がたぶんアジアからはかけ離れているからかもしれない。  
女性のメイクを見ると、たぶん欧米のそれを越えている  
のと、日本人特有の右へ倣い効果で、カワイイの間隔が  
1つになってきているからであろうと思う。

日本人の20代の女性の顔は皆同じかもしれない。  
韓流の美人も似てきてはいるが、スター女優には個性がある。

たぶん日本のドラマには、女性も男性もキャスティングで悩まない。  
みなおなじような顔だし、名前が売れているのが出るから、  
どこの局を見ても同じ顔ぶれになる。 はっきり行って飽きられている。  
なので人気番組には、MCに豊富な人材を誇るお笑い芸人がくる。  
だかこれも飽きつつあるが。

韓流のスターの雰囲気は、昭和の後期の雰囲気がある。  
日本にもスターがいたころの。吉永小百合さんとか、裕次郎とか、  
そこに通じている。  
美人にも個性がある。チェジウさんなど最初は美人という感じが  
しないが、ドラマの彼女は、美人を越えている。  
麗人の域だと思う。ほかにもたくさん女優さんがいて、皆個性に  
あふれている。チョンヒジョンさんとか。  
男優についても、いつも同じ顔の見える日本のドラマとは違い  
個性的なイケメンがいくらでもでてくる。日本なら、ジャニーズしか  
対抗馬がないのか。

なので、そこに気づきだしたのは最初おば様たちだが、だんだんと  
若い方にも韓流スターのなんたるかが浸透したのかもしれない。  
韓流のお化粧品が人気なのも、韓流美への興味かもしれないね。

日本のドラマにも、韓流スターはいかがかと思う。



## さいしょの構想では

---

この大人の童話：本当は絵本にしたかった。だから電腦絵巻にしたが・・・

この2章の部分が大人になった真裕美の回想と日常を書こうとしたために

Flashのアニメでは不可能になった。

それにだらだら回想部分を書いてもなあ・・・

といいつつ結構いい感じなのでした。

とりあえず、次の章の設定だけはしてみました。

次の章は「運命」です

人は運命に逆らえない。10年前にはどうしようとおもったんだっけ・・・ううむー

そんなことを思いながら

勝手キャスティングを考えて、一人楽しんでいきます。

マーちゃんは・・・大橋のぞみちゃんかなー

たっくんは・・・加藤正九郎？君かなー

真由美・・・蒼井優ちゃんかなー

真一・・・お・思いつかん・・・

蒼井優ちゃんは、高校くらいで、大人になったらチェジウスiiにしたお話でも

考えようかな・・・

アニメなら。。絵の感じはルパンの中に出てくる少女って宮崎アニメ？

あーおばかなつぶやきでした・・・

そうそう、ついったーなどで、RTしてくれる方、ありがとうございます。

この本はずーっと無料です。



本当に愛されていませんか？

---

なんか別れるかもって、、あなた。。

本当に曲がり角をまがってもいいのですか？

愛されていることを真剣に見つけようと思いましたか？

ほんのしぐさ、プレゼントについているカードの言葉

あらゆることを思い返してください。

リアルなココロを宝箱にしまっておいても光を失っていただけ。

たぶん、無くせば、それがどんだけ大きく大事なものかわかるはず。

でも・・

無くしてからでは遅いのですよ。

手をつないでみてください、暖かくないですか？

やさしく髪をすいてみてください。癒されませんか？

あなたは無くてはならない存在ではありませんか？

それはまるで空気のように。

あまりにあたりまえすぎますか？

でも空気が無くなったら生きてはいけませんよ？

ひかりの向こう側に笑顔のあなたがいませんか？

縁を結ぶと言われるトライエンゼルの写真をみたくありませんか？

日本では入手が難しいみたいです。イタリアのものが本場のもの。

**Tri Angel**で画像検索してみてください。

三叉の帽子をかぶった、少しそばかすのキューピット人形ですよ。

# 別れ

---

別れ・・・

私たち、人には難しい問題です。

初めて別れを経験するときは、もう天地がひっくりかえるくらいの出来事なんですよねえ。

でもそういうことがあっても、気づいたら幾年も経ってしまう。

その間にいくつも笑いいくつも泣いてという毎日があったのでは？

別れて正しい場合もあればやっぱり悲しい別れもある。

そうでしょう？

動物の別れってどうなのでしょうね。考えたことがありますか？

猫の子なんて、たいていは、生まれてまもなく親と別れることが多い。

犬もそうです。考えたらかわいそうですよね。でも、自然界では

別れもなかなか無いかもしれないけれど、別れるときは、永遠に

別れることになるかもしれないので、どちらが幸せかわかりませんね。

天国への切符のお話を書きました。

天国で会えるならそれは永遠に一緒になりますね。ご先祖、親子も一緒になるでしょう。

愛し合った二人が永遠に一緒になるには、天国への切符が必要だったのです。

そうやって考えると、この世で一時の別れってなんなのでしょう？

本当に悲しいのかどうかわかりません。

愛し合ったままの別れは、きっと一時の別れかもしれませぬ。

どう出会うかも大事だけれども、どう別れるかってのも人にはとても大事なことなのかもしれませぬね。

でも、別れのときはやっぱり悲しいので、できればそういうことが無いほうがいい。

もし別れが必要なら、若いとき、まだ笑顔がもてるうちにしたほうがいい。

この世の時間が少なくなってきたからはとても寂しいものだから。

## 縁結びのトライエンゼル

---

日本では入手困難なので（イタリアなどでは普通にあるとか・・・）

せめて画像がネットにないか探してみました。

トライエンゼルが見たいという人が少しいらしたので。v ^ ^ ;

t r y angelで探しても見つからないんですよ。

t r ienjelなのでした。

でも画像は見つけたのでどうぞ。

無料本の1記事なので引用は問題ないかとおもいます。

（著作権侵害の目的ではないことを明確にしておきますね）





[dreamstime.com](http://dreamstime.com)

ね、三叉の帽子のキューピットでしょう。でもすこし怖い顔をしていますね。厳しそう

奥様もお嬢様も

---

彼の、旦那様の かわりに

私が囁いてさしあげます。

生まれてきてくれて、ありがとう[ときめきハート]

## ときめくこと

---

最後にトキメイたのはいつだったでしょう？

高校生にトキメクって何ですかと聞かれたことがあります。

トキメクって、私感ですが・・・

その人を見ただけで、気配だけでも、心臓がドキドキすること。

一緒に食事をして、喉を通らなくなって食欲がなくなること。

簡単に言うとそういうことですね。

最近トキメイてないなあ・・・

いかんなあ。

## ジョンレノンと言う人

---

ジョンレノンってすごい感性の人だったと思うのです。

彼の歌の中にはテーマとして「愛」がよく出てきます。

小野ヨーコさんと追求したのかな。・・・

「love is real」「real is love」って歌のフレーズが聞こえてきます。

なんかねえ　とっても泣ける

---

某所：ツイッターなどにTLを汚してまで書いていたんですが。笑  
中学生の頃は、音楽の時間同じものを聞いても、ちっとも感動しませんでした。  
それは何かと言うと、シューベルトのセレナードです。  
たしか、歌劇「魔王」と白鳥にかんしての部分だったような気がします。  
これは歌う人によってぜんぜんかわります。

ナナ・ムスクーリさんという歌姫がいました。（今はおばあちゃんなので）  
この人のセレナードは別格なのです。びっくりしました。  
聞いているうちに泣けてきました。  
なんだかなあ～。いろいろなことを経験するとそうなんでしょうか。

それまで私の中の歌姫って、カレンカーペンターだけでした。天使の歌声。  
でもそれ以前にもすごい人がいたんですね。愛って感じます。  
ビデオ見てください。  
聞きながら、「大きな木の下で」を読むのもいいかも。^^；  
<http://www.youtube.com/watch?v=burpyDLgqGM&feature=related>

現代ならサラブライトンさんとか、  
ヘイリーウエステンラ　さんとかいますけど。

でも、ナナさんの歌すごいです。



## 男には一番の残酷な愛する人からの一言

---

おそらく、女性の大半は分かれる決意のあと  
この言葉を言うと思います。

でもね、その彼が、あなたのことを本当に普通に愛していたら  
あなたの目が迷いで曇っていたとしたら・・・

とっても残酷な一言で、男は瞬間に別れを理解します。

「好きな人（女）はいないの？」

です。

心理的には、女性に好きな人が出来たときの言葉です。

自己正当化といいます。

それゆえ、相手をすごく傷つけます。

この傷ついた直後に、男性の真価が問われます。

それなりに成長していれば、そこまで言わせた自分の今までを  
振り返るでしょう。

でも若いときはとにかく自分の都合本意になりがち。

でも自己都合を強く感じるなら、潔くするのも男の子です。

すでにご相手は曲がり角を曲がってしまった。

つまり振り返っても貴兄の姿はもう見えないのですから。

お読みになっている素敵なあなたへ

---

音楽のプレゼント。

2曲プレゼントしますね。youtubeからですけどね。🤗

<http://www.youtube.com/watch?v=hFoO6A3RGQg>

<http://www.youtube.com/watch?v=-yHDph56Rk>